

もの言う牧師のエッセー 第172話

「怒りの葡萄」

カリフォルニアは今年も雨季である冬に雨が殆ど降らなかった。500年に一度とまで言われる大干ばつに見舞われた一昨年から現在までずっとこの調子だ。そんな折、ニュースで“ダストボウル”の話が出たのでゾーッとした。それは約1世紀前に起こったアメリカ近代史の悲劇で、ジョン・スタインベックのピューリツァー賞受賞作、「怒りの葡萄」に詳しい。

大恐慌が世界を飲み込む一方で、中西部の農家たちは、資本家や政府の主導する稚拙な農業政策により沃野を破壊され、倒産・廃業する者が続出。そこへ大干ばつが直撃、耕作放棄地は乾燥し、ひどい時は視界一メートル半という大規模なダストボウル（黒い砂嵐）が発生、彼らはやむなく無一文同然でカリフォルニアなどへ低賃金の仕事にありつこうと移住して行く。だが、再起を図ろうとした彼らを待っていたのは、又しても資本家と政府による労働者への搾取であった。僅かな仕事に群がる大勢の人々。結果、通常のレートよりはるかに安い賃金でこき使われ、殺される者、病死する者、自殺者や餓死者が続出、彼らの夢は無残に打ち砕かれどん底へと叩き落されるのである。

実は米国では今、ファーストフード業界などで働く低所得者達によるデモが絶えない。また、イラク戦争に従事した志願兵らの多くは、仕事に恵まれない田舎の若者らであったことも思い出す。「怒りの葡萄」は決して単なる物語ではなく今日的な問題なのである。

**「そこで御使いは地に鎌を入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに
投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て…」**

ヨハネの黙示録 14章 19-20節、

と、本作品名の由来が聖書の最終章にあるが、言うまでもなく踏まれる葡萄は神を敬わない人間を指す。それは世で言う“最後の日”の類ではない。罪にまみれ、己の事しか頭にない愚かな人間の為に十字架にかかったキリストを無視した者への裁きの序曲である。ところで、映画化された本作品には一筋の光が差している。一家の肝っ玉母ちゃんを演じたジェーン・ダーウェルだ。彼女は絶対に諦めない。神を見上げいつも明るく歩んで行く。神を信じる者は最後に勝つ。

2015-2-20

